

平野鉦水、巴の舞、桑名洲聖、舟弁慶、松本孝水、内田琴水、鈴木琢水、高橋狸水、西郷隆盛、山口速水、本能寺、藤川晴水。

彼ノ矢洲友 九月二十五日、三時東

琵琶演奏会 京日本橋第一証券ホール。城山、加藤洲聖、異国の丘、真住洲佳、紅葉狩、山、尾洲文、重衛、紅林洲紅、竜の口、中村洲心、静、宮崎洲香、横笛、山洲洲鳳、本能寺、稲垣洲玲、敦盛、半田鶴心、湖水乗切、石坂鶴心、堅田落、友吉鶴心、白虎隊、彼ノ矢洲友、菅公、森洲鶴、黎明、松崎洲陵、舟弁慶、荒川洲帆、浩梗の旗、平井洲誠、屋島の誉、桑名洲聖、月下の陣、前田洲月、西郷隆盛、大館洲楓。外に詩舞一題、八時終演。

伝統芸術 九月二十六日(水) 昼十一時

名流会 半東京日本橋三越劇場、主催、象会。飯盛山、弘沢雨水、城山、清川風舟、鉢の木、遠藤鶴東、小栗栖、押川旭葉、伊豆の御難、桑名洲聖、義経記、雨水、先帝御人水、平曲館山甲午、乃木將軍、大館洲楓、曲垣平九郎、山崎旭萃、平知盛、浅野晴風、さくら雨、外に講談、一絃琴、新内、地唄浄るり(各三絃、箏、尺八)等八題。

筑前琵琶会 九月二十九、三十両日金

筑前琵琶会 九月三十日(日) 昼十一時
橋会演奏大会 時彦根市民会館。関西橋会
発足記念演奏会 雨天にも拘らず満員の盛況
であった。城山、田部、中川、絃旭城、衣川、
島田、絃旭瑛、井伊大老、稲垣旭流、佐治、
旭竜、絃旭秀、吉野落、中川島、絃旭城、
別れの盃、岩崎旭心、関ヶ原、島田旭千、禪

師と正宗、田中旭法、絃旭美津、茨木、寺尾、
旭吉栄、絃旭萃、曲垣平九郎、安住旭康、衣、
川、鈴木旭芳、西郷隆盛、三浦旭彦、絃旭鵬、
地震加藤、松井旭松、矢野旭峰、絃旭城、石、
田三成、樋口旭彦、舟弁慶、堀川旭鵬、隅田、
川、矢吹旭美津、大橋公、大迫旭山、鴨川の、
露、佐伯旭瑛、小栗栖、林田旭城、粟津ケ原、
久徳旭蘭、丹生谷旭春、絃旭萃、都落ち、
山崎旭萃、北の庄、堀田旭甲。尚前日発会総、
会が開催された。

(予 告)

○京都琵琶協会の紅葉狩兼十一月例会
十一月十七日(土) 午後一時(厳守) 京福
電鉄八瀬駅集合、徒歩十五分にて九頭竜弁
財天に参詣、附近の紅葉を鑑賞の後料理「
西塔」(電話七〇一五五七八・七二一
二六四五番)に於て月例会を開き夕刻懇親
宴、六時解散。

○赤心流鶴翁秋季演奏大会 十一月十日(土)
午後一時静岡市立婦人会館、関東関西
の名手数氏ゲスト出演

○錦心流一水会全国大会 十一月十二日(月)
午後十時東京銀座ガスホール、翌十三
日は総会及び懇親会

○日本琵琶振興会十一月懇親例会 十一月
二十五日(日) 午後一時東京新宿洲鳳会館

(訂正とお詫)

一、前号(第二三二号)「鈴木鉦次郎氏の美
拳徳を讃える」の記事中、名誉会長問題
で鈴木氏が一水会顧問を辞任したと記載し
ましたが、之は外の事に起因したもので名
誉会長問題には全然関係のない誤記でした。

尚行事の時機に一、三前後したものがあり
ましたので併せてお詫致します。
二、同予告欄「筑前琵琶橋会関西支部全国大
会」は「関西橋会」の誤りでした。
三、本号記事編輯のため十月一日以降の各地
催し物などの報道は次号に掲載致します。

あとがき

秋深し隣りは何をすする人ぞ、前号
所載の東京鈴木鉦次郎氏の記事に就
て鈴木氏が金員を拠出して京紙に就
掲載させられたが、とんでもないこと
あるやに聞き及んだが、とんでもないこと
京紙は金銭で買収されて特定の人の提灯持
をするような事は絶対にしない。鈴木氏の隠
徳に感じた余り事実を報道したまでで物質
によって左右される京紙では決して無いとい
点を深く認識して頂きたい。尚ついでながら
去る九月末金沢市で開催された筑前琵琶会
全国大会の節京都の某女史が満座の中で京
都の琵琶人二、三について根も葉もない悪口を
誅しやかに吹聴して心ある人々の失笑を買
たという噂が風の便りで伝って来ているが、
余りの阿呆らしさに釈明するのも大人気ない
高雅上品を誇る琵琶を愛する人の中に三
文の得(とく)にもならぬ無責任な放言を敢
えてして自ら墓穴を掘らんとする某女史の人格
品位を疑わざるを得ない。心すべき事にこそ。

昭和四十八年十一月一日発行(非売品)
編集者 植村 真水
発行所 京 村 真 社
〒569 高槻市津之江北町一ノ二三
電話 〇七三六(八五)六〇五一番

琵琶
機関紙

京 絃

第二三三号 京 絃 社

楽理を学びながら

合理的に技を磨きましよう (一)

普 門 義 則



昔から三味線三年琵琶八年と云われており
まして、琵琶の奏法が絃楽器のうちでも一番
難しいことになっております。又楽譜があつ
ても単に心覚え程度のものであり、この道の
専門家は検校、勾当、座頭等の盲人でありま
して、特有の鋭い感で練い覚えたものであり
ます。現代でも琵琶の教室では主として勘
本位で教え習っており、之では昔と変
らず琵琶八年と云うことになりかねません。
然し乍ら楽理を学び之に基いて合理的に教
え練うならば、二三年にして確固たる信念
を以て、人前にて演奏出来る技倆は修得出来
ますことを、自信を以て提唱いたします。

私は本年一月から週一回二回のおけいこ
を始めました。初心者で十ヶ月の間は、先づ
調絃法、謡出し、中干落(下段)、切及び相
の手(上段)、崩地(下段)の弾法を学理の
説明と共に研修しました。その技倆は十ヶ月
の短期で不練れて、時々音程が狂うことがあ
りました。本人自身でその音程の狂いを理

解し、音程を正して演奏しております。この
実績より見ましても、学理を理解して研修す
るならば、修業の期間も短縮して技倆向上の
成績が上ったこととなります。

○基 音

すべて音楽を奏するときには、その音の基
準を先づ定めなければなりません。その基準
音は十二律(洋楽では音名)のうちから一つ
採って、黄法(琵琶、大阪義太夫では八本、
他の邦音楽では一本、洋楽A)であれば黄法
調(オウシキチヨウ)となります。

この基準音のことを色々と称えておりまし
て、基音、主音、首音、根音、宮音、洋楽で
はトニック(Tonic)、ドニカ(Donic)、
ローマ(Roma)等々であります。

基音とは、わかりやすく言い換へれば、自
分がうたおうとし、奏でようと思ふ音であり
ます。この音を中心とし、基にして音律が音
階に依つて高低して流動し、旋律が作られ奏
でられているものであります。従つてこの基

音が乱れたり狂つたりすると調子ハズレにな
り、旋律がなりたちませんから、定められた
基音は大切に音程を正しく維持しなければな
りません。

この為には基音はその歌曲、又は楽曲の音律
の中で比較的数多く存在して、大切な個所
に「イイチヨイ顔」を出し、一番落つた感じ
を持って、曲全体におだやかな旋律を与える
主人役の音をつとめるのであります。

では次に基音の音の高さを与へる十二律に
ついて述べます。

○十二 律

私達が耳からはいつて来る音は無限であり
ますが、音楽に使う音には限度があります。
松風の音や海岸に打ちよせる波の音そのま
では音楽にはなりません。これらの音は高さ
が不明瞭であり、一定しない不規則な複雑な
音のまじつたひとときでありますので音響と呼
んでおります。音楽に使う音には、一定の高
さを与えた楽音でなければなりません。楽音
の高さは「毎秒何回の振動数を存する音」と
して言い表わされておまして、それにはサ
イクル(Cycle)、ヘルツ(Hertz)

の学単位が付けられております。
私達の聴覚で聞きとれるのは、最低二〇前
後から最高二五〇〇位迄と云われており、
老人は一五〇〇位迄しか聴きとれないので
あります。又音楽上使用される楽音は、大
抵三〇一四〇〇〇位迄とされております

(禁 転 載)

狂醉亭漫録 (第九十五)

古谷 寛水



去る九月二十三日、京都琵琶協会創立二十五周年記念、琵琶で聞く戦国時代と銘打った大演奏会が京都府立文化芸術会館の近代劇場型大会場に於いて盛大に開催された。

開会の二週間前に関係方面や、お馴染みの一般聴衆の方に対して送付された一千部のプログラムは、四六版二十頁の冊子形で、表紙は会員田中鵬水氏が昔取られた杵束で、藍地に金銀箔を以て、戦国時代の武将の紋を、手摺された豪華絢爛なものであった。

然るに此のプログラム中の、桶狭間の曲の解説に「織田信長を小敵と侮った今川義元は四万五千の大軍を率いて尾張の国境に近い桶狭間に屯し、折からの暴風雨に織田軍は戦など仕掛けて来るものと酒宴を開いて乱痴気騒ぎをしていた。木下藤吉郎は信長に乞うて三千騎を以って雷鳴轟く中を襲撃し、義元を討取った。この戦勝により信長の武威は騰り、国家統一の緒についた」とあるに對し、或る聴客から「木下藤吉郎は桶狭間の戦には参加して居ない」との苦情が受付まで持込まれ、私は受付の方から其の真偽を問われたのだが勿論即答は出来ない。

事件として扱っているので、よもやと思いたがらも、信頼出来る史書を見ると、桶狭間戦

桶狭間戦

桶狭間は尾張国知多郡大脇村にあり、織田信長が今川義元を撃つてこれを殺し、これより信長の威望天下にあがるに至った合戦として古来有名である。その東北に田楽狭間(一に屋形狭間)というのがあるが、実はこの戦のあった処であるが、古来桶狭間戦と称す。正親町天皇永祿三年五月義元は駿河、遠江、三河を併せ得た勢に乗じ、京都に赴き將軍足利義輝に謁して武名をあげんと欲し、大兵を率いてその居城駿府を発し、まづ尾張に入る。これより先信長は今川氏と境を接し、常にその侵略を蒙ったので、丸根、鷲津の二砦を築き、丸根を佐久間大學盛重に、鷲津を織田玄蕃信平に成らしめて、これに備へさせた。その十八日義元は愛知郡沓掛村に達し、攻撃の部署を定め、この両砦に向わしめ、翌十九日弘暁を以て共にこれを陥れ、義元の軍は意氣大いにあがった。時に近傍の祠官社僧等来て戦捷を賀し、酒肴を呈し軍を犒ったので、義元乃ち杯を挙げて餉を伝へ、警備を怠った。一方信長は敵軍丸根鷲津に殺到したとの報を得て、急遽螺吹け具足よこせと言いつつ具足をつけ「人間五十年天下の内をくらぶれば夢幻の如く也、一度生を得て滅せぬ者の有るべきか」と語り、立ちながら食事を済ませ、主従僅に六騎、一氣に熱田まで駆けつけた。折悪しく満潮時であったから、浜辺の近道を避

け迂回して山崎から丹下、中島等の砦の兵を併せて漸く三千に達した。遇々築田政綱、義元の軍勝に驕り警を怠るに由り、その不意に出て、本軍を突かば捷を獲ること必せりと進言したので、信長大いに喜び鳴海町の近傍太子ヶ根に出て、直ちに義元の本營を衝こうとした。時に正平頃黒雲俄に起り、暴風猛雨大いに至ったので、信長これに乗じ、分捕功名を禁じ、ただ捨討にせしめてこれを襲った。義元の軍風雨のために敵の来襲を知らず、不意の襲撃に遭って周章狼狽し、義元は服部小平太忠次、毛利新助秀高のために討たれて死し、全軍遂に潰れた。

以上の記載が正確とすれば、木下藤吉郎は飯令当時織田勢の一員であったとしても今川義元討取の件には一応無関係の様に思える。何分真書太閤記其他の古典は、秀吉の偉業を誇大に記述し、都合の悪い部分は省略した形跡があり、真実の事は神のみぞ知る、位の仕事であり、木下藤吉郎が関係したか否かについては私は判断に苦しむのである。

○大高原五東下り
余白を利用し、更に間違話を一つ。
元祿十四年九月、赤穂浪士大高原五は主家

凶変後初の東下の途上東海道三島の宿にて、無頼の馬子から無法の強請を受け、一刀の許に切捨てんと思ったが大事の前の小事と堪忍して、詫証文と金子を与えて事を済ませる。此証文は明治の代まで三島の本陣世古六大夫の方に残存したので其文面を転記すると、

詫入申一札之事

我等今度下向候処其方に対して不束之筋有之馬附之荷物損所出来申候に付逸々談事之旨尤之次第大きに及迷惑申候依て御本陣衆を以詫入酒代差出申候 仍而一札如件
元祿十四年己九月 大高原五

国蔵どの

右の件がどう間違ったか、大高が神崎与五郎になり、馬子国蔵が馬喰丑五郎となつて、講談や浪曲では神崎与五郎堪忍袋の一席として誤伝され、大正初期には吉田奈良丸のレコードが全国を風靡した事は年輩の方々は皆様御承知の筈である。

此の誤伝にはまだお負けが付いている。赤穂義士本懐を遂げた後、当時講談の名手筑後柳川浪人赤松清左衛門が江戸より帰国の途中宿々で四十七士伝を披露し、丁度三島の宿では本陣世古六大夫方で神崎堪忍袋の一席を演ずるが、之を聞いて丑五郎が吃驚仰天、そんな忠義な且那ならあんな無礼はするのぢやなかつた、と改悟し剃髪して泉岳寺に行き神崎始め義士一同の菩提を弔い、一生を終つた。

猶大高の事が神崎と入替つた事を氣にして明治末年頃橋本綱常なる識者が、東京の講談

師組合へ訂正を申入れたが、結局不発に終つたが、此の詳細記述は省略する。(此項終)

平家物語から (下)



祇園精舎の鐘

辻 旭城

「五条橋」は琵琶歌でなじまれているが、昔の五条通り、今の松原通りに架かつていたが、豊臣秀吉が下流の六条坊門通りに移し、旧名を用いて五条橋といつたから六条坊門通りの街路名も五条通りと改めた。当時の橋は昭和十年の大水害に流失したので、旧形式によつて架替えたものである。童謡の「京の五条の橋の上、大の男の弁慶が、長い薙刀振り上げて、牛若目掛けて斬りかゝる」と歌われる伝説の橋である。

「安宅の関」文治三年(一一八七)義経、頼朝不和となり、家来の中に之を利用して二人を離間せんとする者もあつたので、義経主従十数人は山伏姿に身をやつし、奥州平泉に落ち延びる途中安宅の関で尋問に逢つた。然し弁慶の機智と関守富樫泰親の仁により、ついに泣かぬ弁慶をして涙にくれさせたというので、琵琶や謡曲、歌舞伎等に取上げられた。いま二堂山に安宅ノ関跡碑がある、又勧進帳

に関する宝物は住吉神社に所蔵されている。安宅町は江戸時代から明治にかけて「お酒屋千軒、お寺千軒」とうたわれたが、今は變つて機業の町となつている。関跡は桃川の左

岸の丘陵にあり、昔は川上を横切る交通を監視するため軍事上重要な位置を占めていた。

「仏御前」

「仏御前」の墓は小松市中海町に在る。平安朝末期の美しい白拍子で、加賀に産れて京都に棲み、平清盛の西八条邸に出かけて初めは参入を断られたが、清盛の愛人祇王の骨折りで漸く許され、「君を始めて見る時は千代も経ぬべし姫小松、おまえの池の亀が岡に鶴こそ群れて遊ぶなれ」と今様を舞ったところ、その優美な姿に清盛は深く心を動かされ、そのまゝ仏御前を邸にとめて寵愛した。一方祇王と妹の祇女は、君の寵を失つて遂に世をはかなみ、「萌え出るも枯るゝも同じ野辺の花、何れか秋に逢わで果つべき」の一首を残して嵯峨野の奥に庵を結び尼となった。仏はこの歌によつて我が身に引きつらば、髪を下ろして嵯峨野の往生院に祇王姉妹を訪ねて共に念仏三昧の日を送つたが、後に故郷に帰つて草庵を結び読経の毎日を送つた。それを知つた村人達は、余りの不憫さに時々訪ねて身辺の世話などをしてやつた。ところが村の女房達は我が夫の振舞いを妬んで、とうとう彼女を庵室で殺してしまつたという。現存の京都嵯峨野の祇王寺は、この往生院跡に再興した寺である。

「俱利伽羅峠」は加賀と越中の国境にある礪波山中にあつて、源平古戦場として有名である。古老の話では、元この山中に俱利伽羅不動明王を祭つた社があつたといふ。源平盛衰記によると「谷深くして山高く、

「険難にして道細し、馬も人も通うこと難し」とある所で、古くから北陸間道の要所である。古戦場は小矢部市埴生から礪波山を越え、石川県加北郡津幡町大字竹橋に至る約十二町の旧北陸道を中心とし、南方約四町の山岳地帯で、高さ百メートル乃至二百五十メートルの山々が連なっている。こゝへ行くには北陸線の石動駅で降り、帰りは俱利伽羅峠で乗れば源氏が攻めた様子かわかるが、道は上りとなる。これを逆に俱利伽羅駅で降りて石動駅に出れば、道は下りで楽である。

寿永二年(一一八三)木曾義仲が牛の角にたいまつを結びつけて火を放ち、平維盛の率いる七万の大軍を敗走せしめたのは広く世に知られているが、平家の軍勢が深谷に陥って惨敗したことは、地獄谷の名に残されている。

我が道を行く六十五年(九)



西郷 天 風

今より六十年前に個人商店が愛用した帖簿と云えば殆どが大福帖であった。それは半紙を縦に半折した数百枚を縦長にして厚紙の表紙をつけ、大福帖と筆太に書いた見ると仰々しい頑丈なもので、台帖と元帖の二種の様だった。台帖には毎日売上品目、金額、得意先名等を右から順々に書込んでおき、それを元帖には得意先別に書抜くと云う仕方である。ペンに馴れた私には何とも

扱いにくく、亦幼稚にも見えただけで簿記に改めることを提案し、更に日計表を考案して簡明瞭を期したが、主任殿は相変らず大福帖を続けながら、遂に年末を迎えることになってしまった。

年末には専売局から監督官が調査監督に来ると云うので、主任殿は三日三晩を徹夜の決算である。簿記の方は一晩の徹夜もしなかったが、しかし、決算の数字が合わず、どちらが正しいのか判断に苦しむ主任殿は文字通り頭痛八巻そのものだった。

ところが、此の簿記による決算書が曾ってない完全なものと賞讃され、その原因がついぞ見た事のない日計表であることを知るや大いに感銘し、その、日計表を宇都宮専売局管轄の各元売所に適用したいからとて、見本数枚を持ち帰ることになった。

それ迄永年の間、監督官の小言の前に平身低頭を續けてきた正田荒物店主人は、思わぬこの好転に鬼の首でも取ったかの如く喜び、監督官に数日の滞在を乞い、正月早々町の芸妓を総揚げして各小売店の主人共々大宴会を催した。

監督官と私は主客の座に収まった次第だが、当時二十歳そこそこの私はこの清宴に何等の感興も湧かず、今日記憶に残る何物もない。この様な次第で、私が此の町の住人と定まると、正田茂三郎君自ら中心となり、友人五六名と語らい、茲に琵琶研究の団体が誕生した。稽古場には町立蚕糸試験所の二階広間を

借り受け、早速階下の入口に薩摩琵琶竹生会なる大看板を下げ、週に二日を稽古日と定め、この竹生会なる名称は館林の旧城跡、尾引城内(即ち岡公園)にある池の浮島、竹生島弁天からとったものであった。

いまだ曾て薩摩琵琶なるものを聞いたことのない此の町の人々には驚異的存在となり、其の評判は忽ち近郷佐野の町から遠く足利町の方まで広まった。

佐野や足利は今日市政を布き、共に織物の産地として全国に知れ亘っているが、或日足利から豪華な服装をした若者が私の住居の方に訪ねて来た。そこは館林駅前前の煙草店松本の離れ座敷で、入口が煙草棚脇の通路である関係から、来客はすべて店の者が取次ぐことになっており、応対に出た松本の妻女はこの珍客を私に逢わずに断ってしまった。客商売の家に育った妻女の目には遊び人、道楽者と見えたので若し私が感化される様なことになつては兄に申訳がないからとのことだった。

折角来たものを惜しいことをしたなあ、と互いに笑い合ったが、三日ばかり経て又來訪者があり今度は逢わせて呉れた。やはり足利からで、西洋洗濯業を営む宮城と云う四十歳近い誠に実直そうな人だった。

この洗濯屋の二階に琵琶教授の看板を下げたのは数日後のことだった。

この辺りは低地で平家建の屋根が渡良瀬川堤防の高さと同じ位の為め、この家の二階には渡良瀬川堤防から直接橋を渡して玄関に至る中々オシャレた建築であった。

る中々オシャレた建築であった。玄関に踏入れれば其処は四畳半、左手には八畳の座敷があり、そこからは渡良瀬川堤防を隔て、小高い丘が小柄な樹木を点々と見せ、すがすがしい静かな眺めである、此処に週二回の出張は洵に楽しみであった。

パリ大学で平家琵琶を弾く 館山 甲午 氏



主人宮城氏の話によれば、此処は以前錦心流の石川萍水と云う先生の教授所だったが数年前東北方面へ引移ったので、弟子達が困っておりるところだったと、しかし錦心流ならぬ正派では、と云う訳か五、六人しか習いには来なかった。

とにかく外国で平曲を演奏するのは、館山さんの知る限り初めてのこと。日本人にさえわかりにくいのに、外国人に理解されるかどうか、という不安もある。だが、日本文化に興味を持つ人たちに集ってもらうから、と樂觀している。「歌舞伎にしても趣味のある人にはわかるし、趣味のない人はわからない、同じです。どの辺までわかるかは聞かしてみなければわからないけど、半分か三分の一ぐらいわかってもらえば十分ですよ。それでいいじゃないですか。」

琵琶を手にして七十年。父親漸之進の「平曲を後世に残せ」との命令で、数少ない弾き手の一人になってしまった。だが、ただ伝統を墨守することはきらう。東京音楽学校ではバイオリンを習った。「琵琶はくだらないものと思つたね、西洋の楽器は非常に響きがいいね、驚くべき音が出る。ひとつの音を出すのに研究されています。琵琶はどうですか。研究されていない、あるものを弾いてきただけだ。」

とはいっても平曲のよさは琵琶よりも語りの内容だ、という。「平家だけじゃない、頼朝も滅びるといつている。人間の諸業無常を遠慮なしに語っているんですよ。遠慮のない文学を語るのが琵琶の魅力だと思つてます。だから楽器に立派な音が出なくてもいい。ただ真理を叫ぶんです。」先細りの平曲。伝承する使命感はあるが、本格的な弟子は一人だけ。エレキギターがもてはやされる時世だといふことも、よく知っている。「きびしいときだけど、やむを得ないと思つてますよ。私のやってる平曲も滅びるに決まっています。」それも「諸業無常か」と、くつなく笑う。

青森県生まれ。東京音楽学校器楽科卒。宮城県立仙台一高等教職四十二年間、平曲全二百曲を演奏できる唯一の人といわれる。四十四年宮城県重要無形文化財に指定七十九歳。(昭和四十八年九月九日朝日新聞「ひと」欄掲載)

「京絃」の分布状況



京絃 編集部

昭和二十九年八月「京絃」第一号を発刊し、爾来一回の遅刊、欠刊の事故もなく正確に毎月一回一日刊行を続け、やがてあと数ヶ月で二十周年を迎えんとしているが、この永きに亘り琵琶人や有識者各位から、琵琶に関係の深い貴重な資料の寄稿や連絡を沢山頂いて毎号の紙面を飾ることが出来るのは本当に有難く感激の極みであり、同時に京絃が琵琶機関紙として多少とも皆様のご参考となつているとすれば、発行者として望外の喜びである。

ところで、演奏会などで弾奏される琵琶はどんな曲名が多いか、琵琶人はどんな曲目がお好きか、について本紙第一八二号及び第二二二号で大体の趨勢を報道したが、今回は、現在京絃の分布状況は如何なる状態になつているかを、地方別と流派別とで調べてみた。即ち京絃はどの地方に読者層が多いかを都道府県別に表わし(第一表)、流派別ではどの流儀の琵琶人が、どの程度愛読して下さっているか(第二表)を、京絃の発行部数を基礎にしてパーセントを出してみた。これは昭和四十八年十月末現在のものである。

尚、第一表の内、一パーセント以下の府県は「その他」に一括包含し、又第二表の流派別では薩摩、錦心流、錦、筑前、部外者の五

